

優秀賞

大学生部門

東京都文京区

岩間 優

声なき言の葉を拾い集めて

医学生として初めての解剖実習を終えたとき、私は献体をしてくださったご遺体から多くの言の葉を聞くことができた思いがしていた。

医師になるために、人体の構造を知ることが医学の基礎であり、解剖によって人体の造化の妙を知り、生命の尊さに触れることができるのが実習だ。そして、この解剖実習に対して、自分の遺体を無条件、無報酬で提供することを生前から約束し、実行してくださる方たちがいる。私たち医学生はこの実習が始まる前に、そういう方たちと語らう機会を得た。

「亡くなってなお、人の役に立つことができるということは、このうえなく幸せなこと。私は身内がない境遇だけれど、医学生の皆様が私の遺体から学ぶことがひとつでも多くあれば、それは私が生きてきた証にもなるのです。ちつとも寂しくありません」

献体を決心された年配のその女性は、毅然としてそう話してくださいました。

実際、実習が始まってからは、ご遺体と対峙しながら日々多くのことを学んだ。そして長きに渡る実習の最終日に、私は初めて献体された方の名前を知った。この方が歩んできた人生があり、献体をされようと決めた思いがあり、私たちはそのすべてを真摯に受け止めながら声なき声に耳を澄ます。とても神聖な思いがした。それはまるでひとひらの言の葉を必死に拾い集めるような作業であったようにも思える。生前に一度も出会うことがなかった見ず知らずの方と、医学生という立場になった自分が初めて出会った方と語り合う。

言葉とは、発する人とそれを受け止める人が通い合って初めてその意味を成すということだとあらためて気がついた。私は、日々の生活のなかで、こんなにも丁寧に他人の言葉に耳を傾けてきただろうか。他人の心に寄り添いながら、言葉を慈しんで受け止められる医師に私はなりたい。